# ICCAE 第6回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、12月５日（金）、農学部第７講義室において、2014年度第６回オープンセミナーを開催しました。今回は、宮浦理恵東京農業大学助教を招き、「インドネシア・西ジャワにおける持続的農業と農民による農法・技術の選択－アグロエコロジーの観点から－」と題して講演が行われました。インドネシアの首都ジャカルタからボゴールの方向に約60km 離れた位置にある、農民568名、土地無し農民1,700名のペチル村は、主に耕種（イネ･サツマイモなど）、小家畜（山羊、鶏）と内水面養魚を生業としていますが、家畜のウエルフェアにあまり頓着しない飼育の方法や養魚池の水の放出に伴う環境への影響などに注意を払わない、いわばあまり力を入れない農業を行っています。一方では、不在地主や成功した仲買人として農民を使う者も出てきました。サツマイモの茎葉や家畜糞尿及び養魚廃液を農業経営の中で循環させる方法はあるのに、それを行わない農民の有り様は、村社会が崩壊しつつある都市近郊農村の実態を示しています。このような状況の中で、農民を覚醒させ、環境に配慮した持続的な農業に向かわせることの意義やその方法について、セミナー終了後も参加した大学院生と講師の間で熱心な議論が続きました。

講演する宮浦助教

# 減災館第2回特別企画展「資料からよみとく濃尾地震」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、10月28日（火）から11月29日（土）の間、減災館において第２回特別企画展「資料からよみとく濃尾地震」を開催しました。1891年（明治24年）10月28日に発生した濃尾地震は、明治維新から24年が経過し、西欧の影響を受け、近代化を進める過程にあった日本を襲った地震でした。地震による被害は、震源に近かった岐阜県・愛知県を中心に、大阪府から長野県まで広域に及びました。地震の発生が午前６時38分という朝食時間帯と重なっていたため、地震後に火災が発生し被害を大きくしました。また、紡績工場、鉄橋など、当時の最新の建築物が被害を受けました。

濃尾地震のニュースは電報・新聞・写真などを通して日本国内に幅広く伝えられました。英字新聞が日刊紙として発行されていたこともあり、地震のニュースは海外でも大きく報道されました。

展示では、濃尾地震について海外に伝えるきっかけとなった、帝国大学教授ミルン、バートン、そして写真家小川一真による“The Great Earthquake of Japan 1891”の初版本、写真集、浮世絵などを紹介しました。“The Great Earthquake of Japan”では、当時の被害とそこで暮らす人々の様子が、120年以上前のものとは思えないほど鮮明に感じられます。また、浮世絵には、当時濃尾地震について話題となったことが描かれていますが、なかには、事実とは異なる描写もあり興味深いものとなっており、来館者からは、「濃尾地震が身近に感じられ勉強になった」という感想が寄せられました。

展示と併せて行ったギャラリートークの様子

## 和式馬術供覧を開催

●博物館

演武の様子

博物館は、11月23日（日）、教育学部附属中学校・高等学校の校庭において、体育会和式馬術部の主催により、和式馬術供覧を開催しました。この行事は、教育学部附属中・高等学校、木曽馬保存会との共催、木曽馬乗馬センターの協力を得て開催されました。

当日は、秋晴れの快晴に恵まれ、約200名の来場者が見守る中、和式馬術部員による馬上武術、打毬、流鏑馬の演武等がありました。流鏑馬は、神事として多くの地域で継承されてはいますが、近年では馬や乗り手不足から継承も難しくなってきています。とくに打毬は、現在では宮内庁と青森県八戸市、山形県山形市で見られるのみで、とても貴重な演武となっています。

演武の後は、見学者も交えた打毬の体験も行われ、多くの来場者が木曽馬とのふれあいも含めて楽しみました。

## ひらめき☆ときめきサイエンスを開催

●博物館

石器でクリを粉にする参加者

博物館は、12月６日（土）、博物館野外観察園において、ひらめき☆ときめきサイエンス「石器を使って縄文クッキーを作ろう」を開催しました。この体験学習は、縄文時代の人々にとって大変重要な食料だったクリを使い、遺跡から出土した縄文クッキーの分析結果を参考にして、縄文人と同じように石器を使ってクリを料理してみようというものです。小学生高学年13名、中学生３名、小・中学生の保護者６名の計22名が参加しました。

まず、観察園のセミナーハウスで、遺跡の発掘の様子のスライドを見ながら説明を聞き、次に石器を使って、乾燥したクリを砕いて殻をとり、粉にしたあと、ひき肉や卵を混ぜて団子状にして茹でました。縄文時代には調味料がほとんど使われず、それを再現したため、できあがった団子はあまり味がありませんでした。参加者は「味がしない！」、「素材の味がして、予想していたよりおいしい」など感想を話し合いながら、団子を試食しました。

## 第105回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

講演する諸戸館長

減災連携研究センターは、11月27日（木）、減災館減災ホールにおいて、第105回防災アカデミーを開催しました。今回は、三重県桑名市長島町「輪中（わじゅう）の郷」館長である諸戸　靖氏を講師に招き「伊勢湾台風に学ぶ－災害多発地帯？から学ぶこと－」と題して行われ、71名が参加しました。

「伊勢湾台風」は、1959年９月の襲来から今年でちょうど55年の節目を迎えました。輪中の郷は、洪水から身を守るために発達した「輪中」をテーマとし、木曽三川の最下流域に位置する旧長島町（現桑名市長島町）の歴史･文化･産業を紹介する複合施設です。講演では、旧長島町における災害の歴史について紹介があり、度重なる木曽三川の洪水に適応し輪中によって川と共生してきたかつての暮らしぶりや伊勢湾台風における被災状況が貴重な写真・絵図とともに紹介され、低平な濃尾平野における災害に対する備え方について、諸戸館長の鋭い考察が展開されました。